

「黄泉の国」の考古学

辰巳和弘著

(天学歴史資料館校地学術調査主任)



講談社現代新書 650円

本書を開いた読者は、著者とともに房総半島南部の海蝕洞穴に佇んでいる。波打ち寄せる磯臭い、暗い洞穴には、錆びた甲冑や土器に囲まれた人骨を積んだ、朽ちた丸木舟が横たわっている。——この異様な遺跡が何を意味するのか。著者は私達に同様の事例を次々に見せてゆき、古墳造営が盛んに行われた時代、並行して洞穴葬が行われ、それが特殊な事態でもなかったことを明らかにする。

葬制は時代の死生観を最も端的に表すものである。そこで著者は記紀・風土記・万葉集とい

った文献史料を縦横に駆使し、古代人は洞穴を他界の入口ととらえ、死者の魂はそこへ船で旅立つと考えていたことを示す。同様に著者は各地の裝飾古墳や形象埴輪が何を表し、その背後に古代人のどんな他界が広がっているかを解き語りする。

いつか私達は、古代人が遺した「葬いの形象」に表われた、死後のユートピアを願う心情が、その後の歴史において脈々と受け継がれ、我が国の宗教や芸術等に独特の陰影を与えてきたことに気付くのである。

考古学は「何故これがここに あるのか」という問いであるが、年代・地域特定をしつつその時代の思想に迫る方法もある。それは実証が困難なためあまり進展しなかったようだが、辰巳和弘という古代が見え、読める希有的人を得て、私達は古代人の思いそのものと出会った。まさに画期的論考。

有安美加（フリーランナー）

藤原氏千年

麗谷 寿著

(女子大学教授)



講談社現代新書 650円

京都御苑の北、同志社大学今出川キャンパスの一郭に現存する唯一の公家屋敷を構えているのが歌道の家として有名な冷泉家である。広大な敷地内には平安時代末期頃の藤原俊成・定家以来の貴重な文書・典籍が保存されており、七夕の乞巧奠をはじめ、一年の節々に同家で行われる年中行事も、王朝文化の風情をよく伝えている。その冷泉家は、定家の孫の為相（母は阿仏尼）を祖とする、藤原北家の一流で、その先祖はさらに古く七世紀の藤原鎌足にさかのぼることは周知の事柄であろう。

本書は、その鎌足以下、日本の貴族社会を代表する藤原氏「千年」の歴史を、最新の研究成果を踏まえて書きおろしたもので、「草創と権力奪取の時代（鎌足・不比等と藤原四家）」「躍進する藤原氏（三家の衰退と北家の進出）」「栄華への道（骨肉の争い）」「望月の人（道長と摂関絶頂期）」「欠けゆく望月（院政期の藤原諸流）」「家意識の確立（中・近世の公家）」の計六章からなる、言わば藤原氏一千年の「栄華物語」である。叙述の中心は平安時代の藤原氏の動向で、とりわけ絶頂期の藤原道長の「ゴッドファーザー的存在」に多くの筆を費やす。このテーマは従来の研究蓄積も多く、残された史料から言えることも限られているが、人物批評の部分に「思いきって史料離れ」を試みたところに著者の本領があり、実に興味津々のエピソードに満ちた書物となっている。

竹居明男（文学文学部教授）



千倉書房 4,532円

フランスの保険事業

三好義之助著

(大学商学部教授)

本書は第Ⅰ部「フランス保険事業の発展」、第Ⅱ部「フランス保険事業の構造」からなっている。第Ⅰ部では、保険事業の近代化、損害保険事業の生成と発展、生命保険事業の生成と発展、第一次大戦後の保険事業、経済恐慌後の保険事業、というフランス保険事業の史的展開に焦点をあてたフランス保険事業史といえる内容が主要部分となり、それにフランスにおけるリスクマネジメントの生成と発展を加えている。第Ⅱ部では、保険事業の監督、保険監督機関、保険企業の国有化、保険企業の支払能力、というフランス保険事業

監督法制の史的展開を中心とした内容に、企業形態、保険市場の動向において保険事業運営の形態と現状を解明している。

フランスの保険事業の史的解明という目的意識をもって、著者が長い年月をかけ収集した貴重なフランスの史料や原典により分析・評価した史実を、思想的・政治的・法政策的・経済的・経営的・商業的・社会的背景との関連で立体的に克明にたどりながら、フランス保険事業の生成から現状までの発展過程を綿密に解明した形跡が示され、またそこに事象の生成から変化発展に至る法則的認識がえられており、理論的価値を備えたものともなっている。

わが国の保険研究において、フランスの保険事業に関するこのように精緻で体系的な研究は初めてのものであり、未踏の領域を開拓した価値ある画期的な著書とみなされる。

姉崎義史(神戸商科大学教授)

個人と共同体の社会科学—近代における社会と人間—

西村裕通ほか編著、

(大学名誉教授)

石田光男・大野節夫・

(大学文学部教授) (大学経済学部教授)

落合仁司・川越 修執筆

(大学経済学部教授) (大学経済学部教授)

ミネルヴァ書房 五、〇〇〇円

本書は「市民社会と個人」「家族共同体と女性」「企業共同体と労働」「地域共同体と協同」そして「国家と人類」という五部から構成され、合わせて十九本のユニークで、力のこもった論文が収められている。「個人と共同体」あるいは「社会と人間」という社会科学の根底的なテーマをめぐって、それぞれに一言言をもつ執筆者たちが論じる内容を、限られた紙幅で紹介することとは不可能である。野心的な試みに貫かれた見事なオムニバスに、ぜひ接していただきたいと願うものである。

本書の姿勢は、つぎの言葉に集約されている。「われわれに必要なことは、近代における混乱の原因、《人》の認識におけるアナルシーを自覚して、これに挑戦してみることにしかないのである」(二七頁)。すなわち「共同体と社会」以上に「個人と人間」の取扱ひ方こそが、現代の社会科学が直面する困難だ、という共通認識である。もとよりそれは、人間とは何かを実体的に問うたり、あるべき人間を追求したりすることではない。人間という普遍的な名辞のもとで、大規模な戦争をおこなったのが、現代の始まりだったのだから。「人」みずからが「人間帝国主義」から自由になる」という矛盾にみちた過程は、一体どのようなに可能なのか。本書には、多くのヒントが散りばめられている。社会科学のフロンティアという感の強い一冊である。

中川 清(大学経済学部教授)

メディア・ファシズムの時代

浅野健一 著

(大学文学部教授)



明石書店 2,575円

浅野健一教授は、共同通信社の記者として報道の最前線で活躍された後、一九九四年より大学文学部の教授をつとめられている。著者は記者時代の一九八四年に『犯罪報道の犯罪』を著し、犯罪報道のあり方に疑問を投げかけ、マスコミ関係者のみならず法学関係者にも大きな衝撃を与え、それ以後メディアの行き過ぎた報道の問題についてエネルギーに発言を続けている。本書は、そうした著者の問題意識を最近の事件を通じて述べたものである。

最近、マス・メディアのあり

方を問う声が高まっている。とくに松本サリン事件の第一通報者である河野義行氏が犯人として報じられた件では、報道機関への厳しい批判が相次いだ。本書は、この松本サリン事件をはじめ、一連のオウム事件、阪神淡路大震災などの報道を契機として、事実確認の徹底、匿名報道の導入、プライバシーの尊重などの重要性を説く。そして、こうした点が軽視され続けていることにわが国の報道の問題の根深さがあると指摘する。また、著者はこれらの問題への対応策として、報道倫理の自主規制の必要性を説き、メディア責任制度の導入を唱えている。

メディアが「第四の権力」と

表されるほどの権力をもつに至った今日、社会全体の問題としてメディアのあり方を世に問うた本書の価値は大きい。学生のみならず社会人にも是非読んでもらいたい一冊である。

瀬川 晃 (大学文学部教授)

THE KOBE EARTHQUAKE: OUR RESPONSE

渡辺武達、同志社大学学生
(大学文学部教授) グループ訳

新紀元社 2,000円

一九九五年一月一七日、スウェーデンのテレビであの地震についての恐ろしい映像を見たとき、私は即座に日本の友人に電話し、具体的な状況を知ろうとした。だが、電話はうまくつながらなかった。大災害のあとではあたりまえのことだが、当時、私には私たちの日頃のコミュニケーションがその保守・点検に当たっている人たちによってまもられていることには十分思っていたらなかったのだった。

私は本書、全電通著『英語版・阪神・淡路大震災の記録』によってはじめたその事実に基づい

た。この興味ある事実を気づかせてくれた本は渡辺武達教授と同志社大学への留学生たちによって翻訳されたものである。

NTTの労働組合である全電通の近畿地方本部副委員長・石原史朗氏は神戸近辺が被災した直後、「すべてのものをメモにして残せ！」と命令している。そのことは、災害が実際に起こったときの印象の記録には大切なことであつた。とくに私にとつて印象的であつたのは、全電通の指導者たちや組合員がうまくいったことだけではなく、失敗事項まで率直に記していることである。そのようにオープンな記録は将来の同種の災害にとつて大いに役立つものであろう。

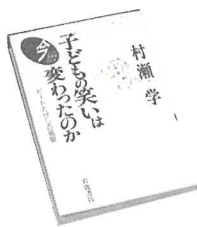
本書で書かれたさまざまなことから、災害時どのようにボランティア活動が組織され、実行されるのかということについて世界中の人々が多くのことを学ぶことができるかと私は思える。

ハンス・ベルグランド (大学文学部書員教授)

子どもの笑いは変わったのか

村瀬 学著

(女子大学助教授)



岩波書店 | 236円

題材の面白さ、論の明快さ、文章のやさしさ、その楽しさに笑いを忘れて一気に読むことが出来た。著者の指摘する「笑いの敗者復讐」はたいへん共感のできるものだ。赤ちゃんの笑いにひかれ私も笑いの本を書く中で、また進化論的な観点からも、笑いの不思議さを「なんでやる？」と考えてきたが、どこか横道にそれしたような（正道をはずした？）気分になりながら笑いに関心をもってきた。そんな笑いの理解のややこしさに「なぜ笑うか」よりも「かく笑う」に逃げて来たようにも思う。そ

ういう思いの中で目にした著者の笑いの「プレゼント」説は、実に明快で勇気がわいてくるものだった。赤ちゃんはプレゼントとしての笑いをひきつけて生まれてくるんだからね。「笑い」と「笑み」を無理矢理分かつこととで理解しなくてもよさそうだし、説明するために無理がなくなりそうで気楽になれる。また、著者のTV番組への豊富な知見だけでなく、文化に対する見方や切り込みもたいへん勉強になった。私もかねてから「泣きは闘いと強要の武器、笑いは親和性と相手の主体性に働きかける武器」と思ってきた。私自身の迫りくる老化現象におびえているだけでなく、「マジ」と「笑い」をからめて生きていかなアカンと元気づけられた。

野村庄吾（花園大学教授）

フェニックスの道徳論と教育

佐野安仁著

(大学文学部教授)



晃洋書房 3,500円

本書は、これまで多くのフェニックスの著書を訳してこられた著者が、フェニックスの道徳教育論に焦点を当てて論じた研究書である。我が国では彼の道徳教育論についてまとまったものがなかっただけに、本書の持つ意義は大きい。

本書は四章からなる。「道徳性の主体的要因と規範」、「道徳性の領域と民主主義」、「道徳性と宗教性」、「道徳教育の原理と方法」である。章題からも明らかのように、フェニックスの道徳教育論ないし道徳論は、宗教との関連が強い。本書でも、道徳

的決定の要因として「祈り」と「告白」があげられているし、「他律、自律、目的律」がティリツヒの「他律、自律、神律」との関連で論じられている。また、フェニックスの説く「価値の民主主義」が「究極的関心といった宗教性」の観点から論じられている。

こうした立場の道徳教育論は、教育の中立性を主張する観点からは批判されるかもしれない。しかし、オウム事件にみられるように、高学歴の人間がわけもなく反社会的な宗教に絡めとられるのを見ると、宗教性の涵養がなされていない人間の弱さを感じないわけにはいかない。宗教は、無反省的に教育から排除されるべきものではなく、道徳教育との関連において配慮されるべきものではないか。こうした点について反省を迫るという意味で本書はきわめて重要な問題提起の書でもある。

林 泰成（上越教育大学助教授）

歌集「わが大和、わがシオン」

安森敏隆著

(女子大学教授)



玲瓏館 2,700円

詠者は朝日新聞京都版歌壇の選者でもある。選者は評者として他者(投稿者)の抒情の行方を見届けねばならない。それは同時に詠者としての自己の抒情の質を不断に問うことに関わる。

一首を示す。「稲荷山千本鳥居を登りきて彼岸此岸にたたずむわれら」

「千本鳥居」にはその一基一基に献納者の無限の願いが込められている。詠者はそれらの願いを自己の願いと重ねながら、彼岸—それらの願いの成就・挫折を超越して絶対者に帰依同化していく世界—に思いを致し、思

い返しては此岸での自己・他者の願いを、いのちあるものに必然する情念として受け止めようとする。「彼岸此岸にたたずむ」とはこのような思念を凝集した一言である。そして「たたずむ」のは「われ」でなく「われら」というのは、具体的には詠者とその夫人と考えるのが妥当であろう。しかし彼岸此岸という仏教語の使用、さらに何より詠者が熱心なキリスト者であること

を思えば、「われら」は文字通り、生きていく上で、とつおいつ戸惑うわたしやあなたをも抱え込む。それゆえ、歌集表題にある「大和」はもちろん、この「稲荷山」もまた詠者にはシオンの丘に重なるイメージなのである。

このように一言一言に深い抒情を感じ得るのは、詠者・評者としての資質とキリスト者の信仰がともども渾然と切磋しているからに他ならない。読者の多からんことを切に期待する。

稲垣定弘(女子大学嘱託講師)

十五年戦争期の中国文学——国民党系文化潮流の視角から

阪口直樹著

(大学言語文化教育研究センター教授)



研文出版 6,500円

中国に対するイメージを問われれば、悠久の歴史・広い国土ということがまず頭に浮かぶであろう。しかし、中国が近代的な意味での「国家(国民国家 nation-state)」となったのは、一九三〇年代、つまり今から半世紀余り前のことにすぎない。アヘン戦争という西洋の衝撃(ウェスタン・インパクト)以来、中国人は長く困難な「国民国家」という「想像の共同体」(ベネディクト・アンダーソン)への道歩んできた。

八〇年代の改革開放以降、中国では資料性の重視・大胆な仮

説の提示といった新たな研究動向を見せてはいるが、一方で五四新文化運動を中心とした毛沢東的価値観(新民主主義論)の亡霊、いわば「五四中心史観」とでも言うべきものにとらわれる傾向も見せている。

本書は、このような「五四中心史観」からの脱却の書である。著者は、「関係性の重視」「文学地理的観点の導入」といった新しい視点を使って、これまで軽視されてきた国民党系文化潮流を研究することで、中国の文化ナショナルイズムの系譜を跡付けする。これは、著者が「方法としての国民党」と呼ぶ意識的な研究方法である。著者が目指すのは、単に国民党系文化潮流の再評価ではなく、中国の二十世紀文学の歩みを実証的に跡付けることである。それは、文学の面から、中国人の歩んできた「国民国家」への長く困難な道程を明らかにすることでもある。

絹川浩敏(立命館大学経営学部助教授)